

比較宗教学 序論

2011.8.20 ~

世の諸聖に最高の敬意を表し奉る。

本序論はこれからの宗教修行を検討する際、自分にそして他の者に私が考える所を与えるものだ。宗教的な悟りへと到達していないのに、大河の激流に身をさらわれ今にも溺れそうになっているのに何故その様なモノを示すのかと言うと、それもまた自然の姿と思われるからだ。世に多くの教師が存在するが彼らは教えながら自らも学んでおり、望み求め得る所を追い求め続けよという姿勢を教え子に教示するものである。

若き日の愚かさ配慮の無さより悲惨な目に遭い其の事が記している因となっているが、老子の様に人里離れた所で欲を出さず隠れておられよという透徹した見識を是非ご参考されたい。かつて他の者が経験した事の無い形の災難、露出に狂ずる所より会得した我よりの忠告である。

* 発して散るは恐ろしい。

政治哲学の帰結である比較宗教をもって修行する。さあまずは目に入ってくるのは仏法である。政治哲学も仏教書に似た雰囲気ではあるが無政策より前提となる宗教は無い。比較宗教の性質を考察する際、政教分離をその儘受け継いでいるので、”其の儘”受け継がれていると言う訳でも受け継がれていないという訳でもないので、形而上学事項は一先ずは切り離される。即ち空無なり。自身宗教的な体を有しないのであらゆる二者対立から絶対す。だがその体を論じなくば宗教とは言い難く不自由である、ならば導かれる所は悟りに利する身体活性法なり。有名なのは、ヨガ、太極拳、少林寺拳法といった所である。その妙技計り難し。これらは皆体を絶した宗教に分類されよう。二つめは政治哲学の精髓で公私分離なり。正しく公私分離されれば政治も円満に収まる。教団とて円滑に運営されよう。つまり公の所に身体活性の術を、さらに私の所に形而上学的領域を置けば良い。仏法は其の体空無なれど他者から見れば有なり。過去に破壊された仏教寺に言及するまでもない。であるから似た雰囲気ではあるがそれは私の側に置く。文武両道よりその儘公部に剣術を用いる事にする。是が非作為非無作為により比較宗教の概略である。使用する道具に不殺刀を獲られよ、一形が竹刀なり。勝負けに非ず。身体が活性されねば意味はなし。されど勝負けの内に心体遊ばすのも一興。戦わずして勝つ是不殺刀の趣なり。遊ぶ度が過ぎて悟

りに繋がらねば意義はないので注意されよ。

我が流派も二天一流とする。竹一刀だが（勿論二刀でも良いが）流派は心意気なので問題無い。武蔵を差し置いて新しい流派を立てるまでもあるまい。武蔵と言えば異常に強く決闘で殺傷を繰り返している印象であろうが、殺刀を置いた後の洞窟修行を尊敬しており相手との殺し合いなど必要無い。古人が真剣のやり取りを通じ体得した強さに魅せられている者も多かろうがここではそれは一切関係ない。それは血塗られた一経路でしかない。二天とは、不殺刀の鍛錬を通じてもう一つの天、破魔刀を体得するという意味であり、この二手をもって一流を生む事から二天一流である。

* 既存団体と紛らわしければ別の名称でも、心起二天一流略して心起流でよろしい（我独りのみ）。

次に剣理について考える。巷間と言われる達人の域とは無刀なり。確かに一見無刀に理ありと思われるが文句に束縛される事なき様注意せよ。無仏はどうか。仏が居ないので悲惨であろう。禅で刀を置いて無所有だと言いたいのか、刀を持たぬ時に敵に襲われたら勝算はあるか？無敵だと破れる事は無い。無刀だと道具を持っていないだけなので襲われたら危機である。皆無刀だとしても素手で殺す気でやって来た相手の腕力の方が遥かに上だったらどうか？刀即ち敵としても己の愛刀が敵とはしっくり来ない。道具を持たぬ理であるのならばそれは何も剣道でなくてもよいので剣理とは言えない。参禅してそうなったのかもしれないが、それだと剣道を介して法理に出会ったのであって、剣理の神髄は無刀と言われても分かったような分からないようなという感じである。刀が無ければ斬り殺されるではないか。では破邪刀と捉えたらどうか？良い感じもするが、それだと心刀で無刀でも良いが有刀でも破邪出来よう。お遍路で杖を持って歩くではないか。…無刀は剣理を解していない人間が述べた事であろうか。禅へ引導を渡さんという心意気ならば甚だ善し。剣理とはそれ不殺刀なりや。如何なる相手でも殺さずに抑える技量、殺さねば和解へ至る道即ち無敵の事也。そのような技量等到底持ち合わせぬ我にとっては竹刀の事である。

武道で一番の利得と言えど何ぞや。それは体力が衰えたら空しくなる事である。

よし、それならば一念発起し暖かい所へ行こう。南に修行の地を求める事にしようか。我は主に真言密教と曹洞禅、南伝上座部仏教、老子、武蔵五輪書を比較してゆく事にする。

* 日本語が学習し易いので上の選択となっているが、外国の方で日本の文化は今一という方は当然日本の仏教でなければならぬと言う事は無い。日本と関わり合いたくないという方は浮世を捨てた僧以外相手にしなくてよろしい。

～ジャイナ教より修行林考察～

南に修行の地を求める事にしようとするが、特にそこまで地理的要因にこだわっている訳ではない。確かに南亜細亜には修行僧文化が定着しているが、修行者は暖かな南の地にやって来るものと断定するのは良くない。

莊子第二十二章 知北遊篇

のように、北方で遊んでいる方もおられる。

(莊子の意識が北に向かった事が重要である)

修行林寒暖二種在り。暖かければ衣服を着用せずとも凍死しないが寒冷地だとそういう訳にはいかない。ここで寺とは何であるかを考えるとつまりは人々の信仰心の表れである。敗北という言葉があるけれども、政治闘争とは暖かな太陽の地を求める戦いを繰り返し敗者は北へ逃げていったという意味であろう。人の一生はよく四季に喩えられるが、生命が誕生する春から実りの秋を迎えて冬へと移っていく。この自然の流れより死を見つめ行ずるには死期である冬の地つまりは寒冷の地の方が適しているのではないかと考えてもよからう。身が引き締まるとも言うし、山を登っていけば気温低下するのが自然現象である。山岳地帯もよく修行者に好まれているではないか。聖者は南の地に来るものという風に決め付けなくてよいだろう。

…修行林二種…

暖地 自然

寒冷地 寺院

人々の有難い信心によって寺が建立されるが、寺が家になってしまい出家ではなくなるという危険も孕んでいる。外で暮らせるような暖かい場所では寺というものに必要性は修行の観点からは特に無い。葬祭式主義の拠点であったり、時にはボロボドゥールの様に極めて芸術性が高い壮大なケースもある。(別に南寺を否定している訳ではない)

寒冷地だと修行場の寺が必要である。食はあっても外で暮らせない程寒い地というのを寒冷地の定義とすれば、其処では修行林には寺院建物が関係せざるを得ない。ジャイナ教は非所有と不殺傷を徹底する宗教として有名だが、昔に裸行派と着衣派に分派したという事だけでも、極寒地だと裸行派では凍死してしまう。また裸だと他者の不快感をいたずらに煽ってしまうので、修行林の中では裸行が許認されるが修行林の外では認められるべきではない。修行林である寺院内部だと裸行は許されるが寺の外では認められるべきでは

ない。認めても寒冷地では凍死してしまう。

*ここでの修行林（暖地）とは、他の宗教宗派者の存在を無視している。例えば隔離されたジャイナ教徒の裸行派のみで暮らしている森林。

さらには、不殺傷だが、厳格なジャイナ教徒だと虫も踏まない様に気をつける、吸い込まないようにマスクをするなど徹底しているいたとあるが、南方だとマラリア蚊など人体に影響を及ぼす虫も多いしそれは暖かいからだけれども、寒冷地だと虫が生息していない、比較した場合極めて少ないので、氷点下でその様なマスクなどする必要もあるまい。問題になってくるのは食料である。寒冷地では暖を取る為、又は寒くて野菜栽培が難しいから動物を殺生して食料や生活必需品とするが、これだとジャイナ教徒だと問題がある。しかし現代ではグローバル輸送時代であるし、そもそも昔だと人がそんなに大移動出来ない。現代には現代の形、可能性があるという事ではないか。

暖地 … 非所有に適している
寒冷地 … 不殺生に適している

*食料等輸出入が極めて発達している事が前提である。ジャイナ教徒はインドに集中しているとの事だが、今日、現地事情を調べ極寒の地へと旅立つのも面白い。この二種を繋ぐのが友好の架橋である。裸行を、南でなければ悟れないと解釈しても、北人の希望者が移動すればよい訳であるから、南北修行林を乗物で自由に行き来出来る様になれば尚良い。

*私もどうせ家屋内で暮らすのならば不殺生力が甘いので寒冷地の方が寧ろ良いのかなとも考えたりする。

～地獄についての考察～

諸宗教に見られる宗教的な特筆すべき特徴に天国や地獄の存在が挙げられる。地獄に行きたくないという思いより人は発心する動機の一つであろう。どの宗教にもと言ってよい程地獄に対する記述が見られる事から、是は宗教比較の際には重要視されなければならない共通性である。世間において修行していたり宗教に関わっている者達の数はかなり多い。宗教というモノは今時では非科学的である故其の様な輩は集団ヒステリーか何かだ、そんな所が在るはずがない、入った組織で訳も分からず生活維持の為上役の真似事をしている

だけだという見解は、科学時代今日の教育内容生活社会慣習上多くの者が其の様に考えるのは当然で、先進諸国においては最も有力な一見解である。

地獄というものを己で見たり見せて貰ったり経験しないと、人から言われた地獄を信じるか信じないかという話しになる。仮に地獄を知る A が地獄を知らない B に地獄を説いた所で B は A を信じる場合もあるだろうし信じない場合もある。つまり此処では地獄を語る記述する主体を悪気無く無視して特別段とせずに地獄比較を取る。

～光の宗教か、闇の宗教か～

君達は光を奉ずる宗教と闇を奉ずる宗教のどちらかが良い宗教と思っているかもしれぬ。しかし光も闇も実はこれは剣理から言って共に外れている。私も今に至るまでにそのような結論に至った。太陽の光が目に入り眩し過ぎたら相手に切り倒され致命傷となる。日光を背にして戦えという教えもある。闇夜に不意打ちにされたらどうか？相手が見えずに殺されてしまう。明る過ぎず暗過ぎずそういう所に好んで我々は暮らしている。日常之理是其の儘真理なれば中庸なり。真昼の政策のみで事足りず夜中の政策のみで足りず。

つまり剣理が教えている所とは、太陽の光に捕われの身となれば弱し闇夜に虜にされると弱し。

輝かしい政策に至れば円満なり …誤解がなければの話である。

イカロス。太陽の熱で蠟が溶けて”落ちた”。

政策が無い所。

非光非闇是人生の重大事なり。

太陽の光も差し込まぬ場所。

一人月夜の寂しさをも忘れる場所。

美しい楽の音も、もうとどかない所。

確かな所とは政策が無い所。

(実は、私はその確かな所だけを考え続けて、監視されていると確信するも大して気にもならなくなったのだ。鉄は熱いうちに叩けば伸びる)

光を奉じる宗教と言っても光のヴェールで包んでいるのを見破るのが試練かもしれぬ。

可能性としては少ないとは思いますが如何ようにしてそれを判断するのか？

神の奇跡か悪魔の幻惑か打ち破る為の圧倒的な試練か。
奇跡か幻覚か試練か

定まらぬ所は定まらぬというのが私の結論なり。

それ故私は両極端を明確に否定する宗教を比較対象に選んだ。自分で考えた事がそのまま仏書に載っていた経験もあり、其の様に言うなら聖書もあり、私の選択にはこの様な背景が関係している。

最初の比較宗教議論にしよう。…世界三大宗教内でどれを獲るか…

今でも覚えているのは、仏書を見たら、”この世とかの世とをともに捨て去る”と書いてあり非常に驚いたという経験だ。
仮に何らかの事象が起こったとして、それは絶対的に自力のみでしかというのも極端過ぎる。他の者の良い教えや助けも度々あろうし偶々自力だったのかもしれない。絶対的に他力によってしかというも同様、道から外れているのだ。それだと君はもし真実を語ると甚だしく妬まれる事になろう。絶対的に他人とは何だ？何かを君に起こす事が出来る他人の力によってのみとは？神か？唯一神によってのみならば、運良く選ばれ与えられた訳であるから何故お前が？と激しく妬まれよう。分かるかな？世に諸宗教があるが、”真実を正直に語ったら徹底的に他の者から妬まれる”というのは法理から外れている。友からほどほどに妬まれる程度が理である。心に幸せを隠し持っているようでは所詮は世で言う評価で天才止まりだと、努力によって壁を越えるという意義に、私は気づいた。世に名著の類いは無数に在るが創作の楽しみなどは所詮は青春を謳歌する若者達の遊びの延長のようなものだ。他者からの評価ではない。世評を超越した所にこそ神妙の聖域在り。生まれて来て、才覚を用いて財を成し女人を弄び喜ばせ一緒に夢を見て語り、そして老いて死ぬ。それが一体何になる？美しい女よ、老いるな。出来ないならば速やかに去れ。幸せな気分になりながらさあ死ぬ時だと思ったらイカロスになってしまったらどうする気かね？（辛辣だが容赦ない衝突から有益な身体活性法が生み出されよう。これは政治論ではない）永遠の愛を与える者が永遠の苦しみを与えるというのも極端である。何故其の様に永遠に善良であるのに、誰に取り返しのつかない永劫の苦しみを与えるというのか？我はこの見解を採用しない。しかし教説にはわざと間違いを書いて試すという事も考えられよう。私が嘘つきではなく君達への善良なる教育者であったらどうかね？真実ではない事を述べても嘘ではなくそれは教育の為だ。つまり繰り返すが、自分で得たものでしか決して定まらぬ。だから修行林を確信した私は強く何度も推奨している。私は数百ページに及ぶ何らかの神を賛美する本を妄想でも何でもいいので少々神様だと思った程度で構わないから書いてくれと頼まれたら、何人かで手分けをしたら出来なくもない。時間があれば一人でも出来る

かもしれない。詩を交え繰り返し神を賛美すればよいのだろうか？君達の中にも其の様な事を出来る者は幾人もおられよう。3,40年司祭として専従すればかなりの作品が出来そう。ストーリーは真実が定まりづらい。脚色解釈が時代人々によって自由自在である。何故あえて物語形式なのかね？真実ではなく存続が第一義という事かね。原始人はテレビを見たら神と崇め倒すだろう。だがテレビの中の人物は神ではない。原始人はそれを神と誤解したのだ。自由な環境から真理が切磋琢磨され導きだされるのだ。違うかね？悪魔狩り等をやっている喋れない雰囲気ですごい満ち満ちていたら皆処刑されるのを恐れ黙りを決め込むに決まっているではないか。この点が西欧は東洋と比べて真理の磨き上げが甘かったのでは？と推測する。別に西欧が劣っている訳でなく恐怖政治が支配していたから其の様になったのだ。聖者を処刑するのは極めて危険で本当に聖者ならばその後で渡って甚大なる悪い影響を及ぼすだろう、であるから彼は聖者なのだ。奇跡を行ったとあるがイエスキリストが実在の人物であるかどうか聖人かどうかという議論は取りあえずキリスト教は捨ててよい。

* 勿論拾ってもよい。其の場合は何故他を捨ててそれを拾ったのか理由を持つべし。生まれた所でずっと信奉して来た宗教だからというだけでは比較宗教の意義が無い。

～新旧約聖書を比較検討する～

旧約聖書は基本的に民族の歴史書、美しい芸術書と解するのが妥当ではないか。選民思想というのもよく言われるが無政策より選民などあり得ない、完全な妄想である。最初から聖書の文化に慣れ親しんでいるので違和感が無いのだろうが、例えば日本の陛下の祖先が太郎と花子（名前は何でもよい）で創造神によって創られた者達の子孫が陛下であり、先祖は八百歳ぐらいまで寿命があったと言われても信者でなければ信じ難い。何かの教育的配慮でそのような記述があるという見解もあろうが現在の科学知見と矛盾する。外見は二百歳ぐらいまでは現代人の二十歳ぐらいか（大体寿命が十倍なので）。外見は百歳の老人の様になり後七百年生きるという事か。これは不老不死思想を宗教教義に反映させたものだろう。最近の人体パーツ医療により悪くなった部位を交換し将来的には数百年も延命するようになるのではないかと主張もあるかもしれない。しかしそれは生命倫理に反するとキリスト教会が否定していたのではないか。死を冷視する事によって宗教的な探究心が芽生えるので、教育的配慮と考えてもこの箇所は理解し難い。

誇張表現であるにせよ、キリスト教の処女懐胎という教義内容は狂気を誘引するもので、中世の魔女狩り（厳密には中世より後の時代であるという内容の本を読んだ事もあるが）でもその影響は無視出来まい。異性間で和合し子が誕生するのであって、交わりが無いのに妊娠する等あり得ない。汚らわしい性行為を経由しないで処女から誕生した清らかな聖体が処刑されるという構造が悪魔を呼び込んだと考える。誇張表現は何もキリスト教だけに見られる訳ではないが非常に危うい。過去アフリカにも展開したが、彼らは侵略した後聖書をくれた、というような話を昔テレビでアフリカの民が語っていた。明らかに光を賞

賛する教義でありその対極にある闇は貶められるゆえ色に執着していると見る。白色は天使、黒色は悪魔というように、後の黒人差別の一因になったと考えられる。冷静になってみれば、処女から生まれた白いシンイチは九百年生きて、黒い民に逆の頬を出せ（魔女狩りの後で）と言っているのを西欧の君が目撃したらどうだ？嘘くさくないか。それは政治問題だと主張するだろうがこの危うさというのを理解して貰いたい。それ故が三大宗教内で選択しなかった理由である。今後数百年間も生きるならば人体パーツが必要である、処女懐胎とは試験管受精の事だという熱心な主張に、どのようにキリスト教会が対応していくのかが課題となるかもしれぬ。後で述べるが、何らかの衝撃的事象を復活と誤解して定義し、そこから生じた誤りが様々な狂気へ派生していったと解釈する。自分はあっさり天国へ行くが、草食動物は行かないというような見解は独断である。草食動物は草ばかり食べて穏やかではないか？罪を犯していないから草食動物になった後天界へ行くのかね？人間とシマウマのキリスト教で言う霊は別物であるから、自分達は天国行きを確約されたシード選手だと言われても、取りあえずそのアフリカで追いかけて回されているシマウマには分かるまい。

* 試験管妊娠だと処女懐胎で明快ではないか？冗談ではなく熱烈な信仰心とはそういうものだ。例えば、冷凍保存された復活していきそうな人物と処女の配合を三度繰り返すとイエスが誕生するという主張を、ホントに教皇は自信をもって退ける事が出来るのかね？

* それならば復活するかどうかこの槍を刺して試してやろうという事になりはしないか？

* 敵に逆の頬をも向けなさい、という有名な教えもあるがそこまではする必要は無い。犯罪者に逆側を打たせて、物を与えさらに其の者の為に祈れとは、自分の身に危機が迫った時に必要ならばそのようにすればよいだろう。極悪人に身を捧げて天国に行くというのも解し難い。例えば、重罪人が君の所にやって来てそのように対応したら、他の被害者遺族が君の事を恨みに思うだろう。何故お前はそんな奴に財産を差し出して援護したのか？と。君とその犯罪者が心の底から赦し合って、それを見た他の被害者遺族達も心打たれるというのも絶対に無いとは言い切れないが、耐え忍び場合に依じてその場を離れるのがよい。

（神父よまずは告発せよ。赦しを与えそうかどうかを唯見守っているというのでは困る。

布教の良い機会なのではないのか？あらゆる己の財産と信者達の寄付をかき集め、日本の役所やヤクザ共等にそれらを与え尽くして私を赦してやるように懇願する者は、神父の中には居ないのか。さらに私に私のあらゆる努力を日本の役所やヤクザ共等に与え尽くしたら和解が成立すると全力で危害を加える者達を愛せよと、そういう教えではないのかね。赦せないからあれは悪魔だ打ちのめせ殺してしまえと、極端な事に成りはしないか？)

イスラム教も捨てて良い宗教と争っているので捨てて良い。（気になるなら君が拾えば

注)

そんなはずはない、ソロモンをまだまだの様に言わないで欲しい、という意見もあろう。では王宮内で自由に過ごして空しくなり、また気が向けば豪華で贅沢な暮らしをして…といった生活の当人と、修行に専心したソロモンでは違いが無いはずはない。私は何も能力の事を言っているのではない。競馬で考えてみて欲しい。才能がすさまじく大して訓練もしていないが恐ろしく速く走る名馬がいたとして、また対抗馬として訓練に訓練を重ねた別の馬は全く前者のスピードに及ばなかったとしよう。確かにすさまじいスピードだが、余力を残しているという事が、その事がまだまだという事でこれは誰でも皆が客観的に判断出来る事柄である。共に古代王としてソロモンと釈尊を比較するのもよいだろう。「コヘレトの言葉」をソロモン後期作とし「箴言」をそれより以前と考えると、明らかに空しさが若い時より増している。

知恵が深まれば悩みも深まり
知識が増せば痛みも増す。

太陽の下、労苦してきたことすべてに、わたしの心は絶望していった。知恵と知識と才能を尽くして労苦した結果を、まったく労苦しなかった者に遺産として与えなければならぬのか。これはまた空しく大いに不幸なことだ。

(コヘレトの言葉 旧約聖書)

また、ソロモンは箴言で以下の様に述べている。

幻がなければ民は墮落する。

(箴言 旧約聖書)

しかしこのように述べるならば、幻がないので墮落している民、幻があるので墮落していない民、幻がないが墮落していない民、幻があるが墮落している民と大雑把に考えても四種在あろう。幻を対象として意識行為を働きかけるのは良い事なのか無駄な事なのか、幻に溺れ切るといふのはどうなのか、幻を有効に利用するという事か、など重要な箇所だが曖昧である。つまり幻を発奮材料として快樂の香油として民に感受させ幻ではないところへ導かんとする、ソロモンが奉じていた神に対する民達への結論が以下であるという事だろうか。

人間にとって最も良いのは、飲み食いし自分の労苦によって魂を満足させること。

(コヘレトの言葉 旧約聖書)

晩年になって空しさが増したのだから、死が近づいて空しくなったという事。「知恵が深まれば悩みも深まり、知識が増せば痛みも増す」。この箇所を仏教と比較するとよい。確かに癌かなにかの病でもう余命が無いと医者に言われたら生氣失われ空しくなるだろう。しかしこれは若い時分でも死を考察すれば理解可能である。知識が増せば痛みが増すのだから、何も持たない所の追求がソロモンは仏陀と比べたら甘かったのではないか。「人間にとって最も良いのは、飲み食いし自分の労苦によって魂を満足させること」というのは彼の思想を端的に表している。神の前では大差ないという事で、努力し集めてみても空しい感謝せよという理屈である。釈尊は出家してついで最初の師から、無所有処を教授されているので、差は出るのか出ないのかという所を話し合うのもよい。努力が虚しいのか虚しくないのかといわれたら一般的には虚しいものではない。人は努力するから何らかを得るので、是は理である。ソロモンが努力しなかったというのは正確ではないだろう。知識が増せば痛みも増すのに、知識を増やす努力によって又は其れを中心に苦しみの解決を試みたとも考えられよう。非学非無学なり。ソロモンとソクラテスを比べるのも良い。

*一般的には幻像は、蜃気楼の様に幻を幻と解さずに真なるものと誤認し、水場を求め目指し歩き続けるが徒労に終わる事から分かる様に、目的地とはきちがえる過ちによって耐え難い苦痛となる。誤認によるものだ。だが幻像を真なるものではないと正しく認識していたら、遠方から蜃気楼を蜃気楼であると理解し家族で見物する様に、それならば苦痛ではなく快樂に属するものである。映像芸術等もアニメーションである映画であると理解しているので快樂物なのである。ここで問題になってくるのは、”幻を幻と知りつつ快樂物として感受するという行為とは何か”という事である。

何故西欧の天才は聖書を信じるのか？

”復活”という何らかの共通感覚が体験した者に存在すると仮定しよう。一度復活すれば、聖書を読んでも復活体験がそれを経験した者でなければ理解し得ないと思われるように聖書内に記してあったとしよう。福音書には「イエス、三度自分の死と復活を予告する」とある。つまり、絶対的他力によって一度復活したと思っている人間がこの箇所を読めば、神は自分には一度しか与えなかった奇跡をイエスには三度与えた。自分には今後更

なる二度の復活は恐らく無いだろう、これがイエスキリストが大王たるゆえんである、という風に考える。自分の歴史、教育文化背景より、“その体験があまりにも鮮烈であるならば”、彼はそのまま先人達のように聖書を容易く信じるだろう。しかし西欧の先人達が皆聖書を信じていたかどうかなどは分からないし、それはその彼がそういう風に思い込み決めつけただけだ。先人がどのように考えていたのか等どうやって確認したのかね？（徹底的に光を賛美するように思考するようになる）。一度しか復活していない人間が、後の者を宗教教義に従属させる為に我らの王は三度復活と記したのかもかもしれない。本当に三度復活と何故君に分かるのか？嘘だったらどうする。嘘ではなくとも虚妄のヴェールを破る為の試練だったらどうだ？…つまり絶対他力によって復活の奇跡が一方的に与えられるモノと何ら疑念を抱いていなかったら、彼はそのままキリストを崇めて、後は作事によって芸術的な生涯を送るに違いない。しかしそれも心もとないと言わざるを得ない。死んで天の迎えを待っていたが（復活したので神に選ばれたと思っているので）、迎えはなかなか来なかったらどうするかね？

東洋だと親しみが今ひとつなので、ソクラテス、アリストテレスが、無知の知や中庸を説いているのでキリスト教よりそちらの方が分かり易いと思うかもしれないが、言葉に束縛されてはならない。前述のイカロスも神界領域を犯そうとして人工の翼を焼かれた不遜極まりない人間という風に解釈する事も出来よう。私も昔そのように解釈した事もある。それだと超高層ビルを建てなければ良いではないか。

単に中庸を少し直感して書いたのと深めたのでは全然違う。ソクラテスは深めたがあえて記さなかった可能性も無くはない。無知の知という事で気になるが、しかしポリス内で問答していた内容を弟子のプラトンが受け継いだとすれば、アイデアについて何も知らないと知っているという意味か、アイデアを知る事が出来ないと知っているか、解釈するのが妥当なのか。アイデアは無いと知っているという事か。其の様ならば永遠の都を求めるわけでもない（永遠の都ではないとは言っていない永遠の都であるとも言っていない。”求めるわけでもない”）ので外れている。東西の大学者は共に中庸だが（孔子、アリストテレス）、しかし彼らが聖人かと言われたら、聖人の定義次第だが、記したように政策が無くなるので政治学ではないというのが私の見解でそれならば老子だろう。中国では学問達者の尊敬に値する先生の事を老子と言う（老子で敬称となっている）。簡単に考えれば、政治というのは政治を与える国家を他の国家よりもひいきにするという事だ。

先程の言い方だと、積尊に問題があって仏教が有となり矛盾している宗教であるという風に言及していると誤解されるかもしれないが、自分を抛り所にして修行しろというのが一番の教えだったのではないか。仏教団体という名称と形態に束縛されれば、全然関係無い団体を仏教団体と誤認する。

それでは西欧には良い感じがする哲学者は居ないのか？自分は西欧人だから東洋が嫌いという訳ではないが悲しいと思う方もおられるだろう。西欧系を立てたいというのなら、ストア派のゼノン克師（克己、ストイックの意、国師とも読まれよ）には耐えうるモノがあると思う。著作は喪失しているとの事だが、今後の自由展開を期待出来るだけの惹き付ける力を感じる。

アパテイア … (以下参考 清水書院 倫理高校教科書)

情欲や快樂にわずらわされず、そこから全く自由になった境地。仏教と類似性が見られる。つまりストイックに修行したらこのように考えるようになったという事ではないのだろうか。自然調和思想には老子との類似性を見出せる。

自然は普遍的なロゴスの法則によって支配された生ける世界であり、人間にもこの種子が宿っている。自然をつらぬく法則と一致するように理性的に意志をはたらかせることによって…この思想と梵我一如思想には類似性が見られる(ここでは仏教思想と梵我一如思想の違い等は無視している)。コスモポリタン思想(ロゴスを持っているので人間は平等で同胞である)にも仏教と類似性が見られる。

ギリシア哲学思想のあまりにも雑然とした中で賢者が探求したものとは何だろう。ゼノン克師のスタートラインにはソクラテスが大きな影響を与えたのかもしれない。そこから厳しい修行を開始したというのだから西欧の修行僧である。プラトンやアリストテレス等と比べると現状では目立たない存在のストア派のゼノン克師だが、アパシーは政治的無関心とも訳すではないか、私はゼノン克師に聖性を感じる。曲解されている部分も多いと思う。

紹介文には、自然学、倫理学、論理学の三分法を設定した、とある。論理学というのは大乘仏教教理に見られるように非常に重要視されている。ちなみに例えば私も、序論を書いてストイックを語っているが何故家で寝ているのか?と言われたら、其れの事を論理矛盾と言うのだ(疲れているという事にして下さい)。自然学も現在の物理科学のように唯物論的自然哲学のみを扱っていたのかは失われてしまったという事で厳密には分からない。アパテイアを賢者の到達境地においたという事だが、この倫理学が老子より批判されるかどうか議論するのも良い(以下参照)。

*無知の知とは、知らないのを知っているので其の分少しばかり優れていると考える事ではなく、知らないので決定的に劣っていると知る事。知らないと嘆いている人間が其れを理由に優越感を抱くなど高慢であろう。

プラトンを通じてのソクラテスは奥深い。例えば、現代で言うノーベル科学賞を取った学者に私が、「あなたは科学の事を知っていると思っているが私は科学の事を知らないのを知っているので私の方があなたより其の分優れている」と述べたとしよう。そりゃあなたは、例えば化学の事はノーベル化学賞を取った私よりは知らないだろう…何故です?、とそこでその学者を知らない事まで知っていると思っている愚者にして簡単に話しは終わらないはず。「私は他分野を知っているなんて思っていない」などと反論するだろう。

～仏老比較～

老子と釈迦牟尼には明らかに類似性が見て取れる。老子は悪くないと他著で述べたがあくまで政教分離を考察する上での事であるから誤解があってはならない。政教一連の流れを吟味する際においては、老子の”引退”の方が分かり易いと言えなくもない（もっとも仏教にも、釈迦牟尼は文武に優れていたという教説があるが）。釈迦牟尼には修行林、托鉢、乞食の文化が、老子には政治文化という、今尚両国の特徴を示しているそれらが特筆すべき背景である。釈迦牟尼が王国を捨て去った様に、老子もまた五帝より退いたのだ。

*老子に批判されている点から考えると、当時の儒家には仁義は安政圏に収まる政策（人為）であるという主張があまり為されなかったのかもしれない。人倫は切り離される様で切り離されぬ所より生じるならば必然でありそれならば批判は受けぬ。目的であってはならぬ、唯中に和する。

政治大国から退く所に明かりを灯した。如何に老子が巨人であるかがお分かりになろう。人は所有より家を建て定住した。是は自然の流れである。では老子は布施をどのように考えるであろうか？修行林とは本来空地であるから其処には果実が実るのみ。僧に布施、托鉢するという習慣は人為的である。其の様にしたら良い事があるという教えが有るので布施する者は熱心に行く。布施をし功德にあずかろうと思う者は自ら修行しないので他力に偏り僧の修行も楽に偏る。僧らにも劣僧、小僧から高僧まで千差万別で、一見判別が在家人にとって難しい故、欺く所が起る。我国でも多き事例を耳にす。其処を政治力によって強烈に保とうとすれば其れを偏った所と言うのである。釈尊とは当時の婆羅門の中に在り去って行かれた乞食であろう。

僧に布施する托鉢するという習慣、其の様にしたら良い事があるという教えが有るのも是もまた自然の流れである。

常拒絶、非常拒絶、暗布施托鉢、明布施托鉢、受余物、与余物の六種あり。常拒絶とは一切常に拒絶す。非常拒絶とは常ではない拒絶を示す者の事。布施托鉢とは其の儘の意。熱心に作った料理を渡すのも良い。暗布施托鉢は在家者が今一漠然と周囲に合わせて托鉢等を行う所で、明布施托鉢とは在家者が明確な意識を持って喜びの内に托鉢等を行う所である。受余物とは僧が余り物を家町に貰いに來る所で余っていなければ断る所作。与余物とは僧に余り物を与える所であり例えば余った消費期限切れだが食せるコンビニ弁当の機械的政治的な配布の事。

諸宗教を信奉する方へ

君達は凄く傷ついたかもしれない。赦して欲しい。特にキリスト教徒ならば高度な赦しが話題になるであろう？皆で仲良くするのは政治学での事。比較宗教での私部や公部の身体活性法開発の為に非暴力的な手法でぶつかり合って高め合って行こうではないか。この際だから間違っている宗教は斬って捨てていこう。そんなに皆で傷つけ合わないで仲良くしたいかね？皆さんは政治の次元で争い実際に多くの血を流し続けている。これは悲しい事だ。そんな愚かしい事はやめて宗教的な所でぶつかり合おうではないか？君達は戦う場所を間違えているのだ。宗教的な次元でそんなに傷つけ合わずに仲良くしたいかね？つまり、君達の宗教は真理ではなく保存しなければならない文化であるという事か？真理など何もないのかね？そちらの宗教とこちらの宗教の内容が大幅に食い違っていけば、どちらか一方真なるか、どちらとも間違いという事になる。君の宗教はひょっとしたら愚か者が信じ込んでしまって作った宗教ではないのか？生まれて来てただ周りが皆その宗教を信奉していたからそれを受け継いだけであろう？政治が改宗を赦さずその宗教が生き延び続けていただけではないのか？街の支配宗教は違いますよと黙っていた清貧の人が天国に行ったかもしれんぞ。文化であるから宗教等どうでもよいかね？信心深い君にしては一体どうしたんだ？真理であるならば、真理を守っている宗教を信奉する事は甚だ利益となる。そうだろう？君は何故宗教にそんなにこだわる？天国以上の所へ行きたいと欲深く考えているからだ。違うか？仮にこの世に生まれてしまっても今以上の幸福な家庭に生まれたいと願っているからこそ、信心深いのではないか？正しい宗教だったら天国行き、君は天国に行こうと自信があったがそんなはずはないと混乱してどこかへ行ってしまったらどうかね？そんな事はあり得ないというのなら、何故君はそんなに信心深いのだ？何故そんなに皆あっさり天国に行くのかね？真理にこだわっているからこそ、厳しいぶつかり合いが比較宗教では必要だ。天才と皆に言われた人で尊敬されているならば天国に行くと思うか？理由はどうしてだ。凄い才能を神が導いたからか？悪魔が与えた力ではないと言い切れるのか？

大悪を行うに何の躊躇いも生じぬと言うのなら、まずは虫でもじっくりと観察して、生命の不思議を熟考されたらよい。

剣理でこれこれ説明してみたが、剣理とは勝利の法なり。宗教における勝利とは皆さんでは取りあえず天へ行く事ではないか。絶対神を立てている宗教も多い。誤解が多いかもしれないが、仮に絶対神格を立てていなくとも絶対神を必ず否定しているのかと言えばそれは宗教によろう。あえて言及しないという事も十分あり得る。理由は例えば穢されないようにする、等いくらでも思いつくではないか。

その宗教では剣を作ったのも神様なのだから、君達は君達の剣理を活性術に生かして欲しい。何故全てを作り出した絶対者を奉じているのに出来ない？それは矛盾だと思うが。作りだした所に良い方法を聞いて出来ないのはおかしいではないか？本当にこの世界から天界への道を管理しているのかね。

…我も何か述べよう。

剣法とは？ — 無心だ。理由は、考えていたら隙が出来て斬られるからだ。

明快だろう。道人より前々から言われている事であって目新しい話でも無い。

力が湧いて来る、俊敏になる等、宗教的な方法で何かないのか？身体を活性化させ感覚を鋭敏にし続けている者とそうでない者の宗教理解が同じはずはない。インドでは古来より外で自由に修行する慣習があるが、インドの諸宗教には共通している部分も見られよう。徹底的に外で修行した人間と私が同じはずはない。事実同様ではない。似たような事を複数教義等が言及しているのならば、それは研ぎ澄まされた先に何らかしらの共通性が見えて来るという事であろう。弘法大師の金剛峰寺も元来は一つの寺でなく、高野山全体が金剛峰寺という事であったようだし、インドの賞賛に値する最高の功績とは、修行林を示した事だ。

序論では三大宗教の比較検討を試みた。しかしあくまで仏教が残ったというだけであって、私が仏教団体に所属している訳ではないしこれから何処何処に所属する等も自由だ。仏教と言っても、密教には男女の和合をもって修行とするそれを教義の中心に据えるという原始仏教とはかけ離れている団体も存在していたようだし、今現在でもその手の仏教団体もあろう。イスラム教やキリスト教の君達も気に病む事は一切無い。その気になったら改宗するのも自由だし、改宗しないで新しい宗派を打ち建てるのもいいだろう。無所属になるのも良い。かたくなに現状を貫かれるのもまた良いではないか。宗派間の暴力的な争いなど私から言わせれば青い。其れが真理ならば比較、修行を続けていくうちに其処へ辿り着く故、君の好きな宗教宗派でよい。決して他の者を己の派閥に入れようなどと愚かしい事を考えるな（政争に墮す）。殺し合って一体何になる？

宗教を登山と思えば新宗派に対する不快感も和らぐはず。より早く確実な頂上への道が無いかと信心深い者達が思索するのは当然ではないか？古来より伝わる道へと立ち戻ろうとする人々の為守ろうとするのが君でよい。従来より優れた登り方道を伝授する為に、己の宗教で説かれている何かしらが天から降りて来きたのを邪道な宗派へ導く者をつい殺してしまったらどうするのだ？まだ自分の宗教の宗派以外のみ唯一正しい道と認めたくないと言い張るのならば、君の宗派の勉強の為に例えばテレビやラジオ、インターネットを利用して学習するというのはどの様に考えるか？開祖の頃の昔はこの様な機器は存在しなかった。全く同じ形を、当時と同程度の自然主義を取るならば、其れを利用するのかしな

いかで大きな論争にはなるまいか？色々な動画像を見たりして信者が脇に逸れていく事も十分予見出来るではないか？其れを利用した段階で己の宗派だがもう既に別の宗派になっているのではないか。殺し合っただけで一体何になる？単なる政治問題ではないのかね。

*例えば、イスラム教の多数派スンニ派が、インターネットを許容するかしらないかで分派してしまった場合を考えてみたらよい。仮想空間上には崇拜対象と成り得る偶像物で溢れており、インターネットの近接により、信者が隠れながら何時でも自由に偶像物にアクセスしているので問題になっている場合等。

念を押すが、君達が拾いたければその宗教を選べば良いのだ。イスラム教にもスーフィズムなど色々な思想があるし、イスラム戦士だから剣術とも相性は良い。上で武蔵があるが、数十戦もして無敗なので（一度でも負けたら死ぬから。相打ちも同様、完全勝利でなければならぬ）、日本刀の打つ速度を考えて、相手も相当自信がある者達ばかりであったろうし、もう普通の人間の域ではない事は誰が聞いても明らかである。修行の結果、通常の人間の次元の超越を示す、希有な極めて貴重な存在事例として、神として祀っているのである。

私には君達を引き入れる場所など無い。否、厳密に述べれば”表面的に場所は無いが我という者がありきならば有る”のだ。冒頭に、これからの宗教修行を考える際…と記しているのですそれは各人でご想像されよ。

私と君はこれから何をしたら良いと思うか？

取りあえずは、比較学も程々に、それに加え五大を我らに示そう。

～五大修行道～

三方角（道標）

克己明心

固死流生

自観大愚

克己明心とは洲途一苦（ストイック）の意。

自観大愚とは私が現時点で知り得た最高の知識です。一文だけ何か其れのみ、最も尊い知っている事を記せと言われたら是を述べます。己と”徹底的に修行した”修行僧が、所詮は同じ人間なのでそんなに大して変わるまいという高慢の心こそが最も恐るべき魔であり、人はこの魔に捕えられもしくは気にもせずに老いて死んでいきます。大愚を解するという事こそが無知の知です。

五大

火、剣術（武動剛公）

水、比較宗教学（文私）

土、呪法等の唱える類（真言力）

風、無為自然（一）

空、ヨガ（座禅含。静柔）

*公私とは比較宗教学の公の部分、私の部分。
上以外も自由に行うべし。我もそのようにする。

*土、呪法等の唱える類（真言力）とは例えば、呪文や念仏等の言葉の力に関する追求。言行一致によって信用力を上昇させていく修行が基本である。聖典等に記述されている内容と信者、修行者の行為があまりにも外れていると真言力は発生しづらい。仮に”殺せ、皆殺しにしろ”と経典に書いてあったら、信者の多くがそのようにしていたら発生する。しかしそれはマイナスの力を呼び込む方で、又は政治の安定政策圏から外れているので却下される。つまり指針として、経行一致（奉じている聖典経典と信者修行者の行為が一致）している団体の呪文等を優先的に比較策定していく様にする。

*風、無為自然（一）とは、修行者の自然観に関して。

共に、席を共にせずとも、頑張っていきましょう。

～オウム真理教後の日本への影響～

おん

(梵語 om (mの下に点あり)) インドで、祈祷・讃歌・呪文などの最初に用いる神聖な音。om (mの下に点あり) は a,u,m の3字に分解され、さまざまな神秘的解釈がなされる。密教で、多くの真言の最初に用いる。

(広辞苑より)

つまり何という事か、…日本ではインドの神聖な音を馬鹿にしてしまっているという悲しい現状なのです。オウムという言葉は嘲笑の対象になっているがこれは良くないので注意が必要です。

～仏教と比較宗教の比較～

仏教を勉強してみれば、比較宗教は仏教を唯真似ただけなのではないかと、愚者が記した仏教の外流宗派の様に理解されるかもしれない。あくまで他宗教などは比較対象に過ぎないので、他書で仏陀の全てを否定しても別に良いと述べたが、仏教を否定的に比較してみようと思えば可能である。

仏教は空の教えという事だが、他宗教者や一般人から見れば有に偏っている。比較宗教は空である。

仏教教義は有という訳でも無という訳でもないという立場だが、他宗教者や一般人から見れば其処に存在している有でありそして一見すると無の教えである。比較宗教教義は有という訳でも無という訳でもない。

仏教だと政治からの一貫性の議論が軽視されている。仏教だと空無が政治より断絶しているが、比較宗教だと宗教平等政策よりの空無の継承である。釈尊自身は身を以て政教分離を示しているので良いが、仏国土というのは政治哲学の範疇でもあるから。公私分離の議論より、今現在比較宗教を偶々述べた私が書いてもそれによって先の有無性を害さない害したとしても程度が低いので自身の自由を縛さない。政治哲学からの一貫性の議論が軽視されているので、女性差別等の誤解が誘因されかねず、甚だしくは、国民の気力を消失させ国力を減衰させるので、権力者に良くない教えと捉えられ反発を招く。

*出家も仏陀の政治に関する教説と考えるとよい。政教分離、王席を空ける。王は中央に

座し道の真中を歩く者だ。政治哲学では、無敵政策と共に空席が重要である。分かってくれたかな？ 幼子の成長と共にそれまでの席は空く。政治倫理での究極課題は権力欲の統制である。何時の世でも座席にしがみついて席を空けない事が恐るべき害悪となるのだ。悪政がどれほど他の者を苦しめるか歴史が語っている。中国でも空席は堯舜に見られる様に禅譲をその極みとしている。引退とは席を空ける事だ。

仏教では釈尊以前以後の諸仏を認めるならば話しは別だが、一般人や他宗教者の理解では仏陀が開祖という事で広く認識されており系譜が釈迦牟尼より始まっている。比較宗教は、誰々から始まったというわけでもないし、いついつ終わるといふ事もない。

比較宗教は正しい比較も間違った比較という事もなく、他宗教との優劣を超越している。他に依存するので優れているも劣っているもない。上述した内容だと、剣道や仏教、中道や中庸といった、他道の哲学を自由に用いて見解を示したに過ぎない。私自身参考にした其れが無ければ是を書く事が出来ない。

仏教徒は非所有という事だが、経典を所有している、もしくは其れをどこかに置いて修行している（無所有）。比較宗教は非所有。

仏教徒が着る衣は托鉢をし易くする為の目印、社会による公認。我に金を布施すれば主らに良い事が起きると高慢。そして我を苛立たせれば地獄に墮ちると脅迫。比較宗教では、其の様に述べている彼らを只比べるだけ。

仏教は固、比較宗教は流、変幻自在也。

仏教は多数者の解釈によると釈迦は王なり。比較宗教の王席は空じている。政治哲学より民主主義を継承している。

仏教は道の終わり（と主張する）で中程の宗教（中道）を作為す。比較宗教は道の中で中程の宗教（無敵宗教）を非作為非無作為なり。

*しかし、仏陀は昔からある真理を伝えたならば、作為という事はなく、非作為非無作為となろう。道の終わりでも中道だから問題無い。中庸だと程々の所の道中で、と解釈されよ。行き過ぎや不足のない中正の道と言うではないか。儒教でも、発して中ると言われるが、これは未発の段階では無敵、外発して敵を倒したら無敵、強さの究極は無敵、という事で前述の通りであり、中る即ち無敵という事で和する。これが天下無敵、平天下という理解でよいだろうが、しかし、政治哲学、人倫を、其の先は無しと解釈してはならない。日本でも中々の人物と言うではないか。中中を文武と解す。

仏教は指導責任を所有する。比較宗教は指導責任が有る訳でも無い訳でもない。

*仏教だと説いている様に、其れは法でなければならぬ、という責任は当然ある。比較宗教だと、如何なる宗教の其れが法でなかったとしても別によいが、比較結果が影響されるので責任は無いという事はない。

是等中庸による見解也。

仏教は教説を考察すると其の体が空じれば比較宗教になるまいか。修行が大事と解せる。

そこまで仏教を否定しなかったが、それは次以降の項目に廻す。

仏教でも他の宗教でも、否定させたり考えさせて弟子を育てるとか色々あるだろうから、言語表記では捉え切れぬモノなのである。その著作より、弘法大師も弟子に比較させようとしている事は明らかである。私は比較した際、三大宗教の中で仏教を良さげであると残したが、公私の私の方である。仏教だと寺院が破壊され教義が減びたとしても空しくなり、それすら教えとなる。なるほど、そう言われたら比較宗教の方が良さげに思えて来たから、空海より私の方が優れているのではないかと、若い君達は思ったかもしれない。だから言語表記では捉え切れないのであって、弘法大師は密教、仏教宗派に身を置きながら他宗等とを比較しているので、反発を招くので良くないと解されるのもよい。反発それすらが教えであると解されるのもよい。さらには滅ぼされたとしても空しくなりそれすらが教えであると解されるのも良い。比較宗教という特定宗教が存在してしまうのは良くないので、比較宗教はあえて語らず、と解されるのも良い。比較宗教という特定宗教が存在しても別に問題ないが、唯言及しなかったそれに値しなかったと解されるのも良い。

～中庸～

中庸と言え、かたよらず常に変わらないこと。過不及のないこと。過大と過小の中間に対する知見、特定の考えや立場にかたよらず、中正である事。この様に解説され中庸に関する広く知られる理解でもある。それでは過大と過小の中間とは一体何であろうや。過不及の無い事とは何か。彼は黄金を過剰に所有している、彼は黄金の所有が不足している、つまりこの所有の中間、程々の所とは一体何処かを考察する。かたよらず常に変わらないこととあるが、倫理、道徳は当然国家に影響されるものだ。或国ではほどほどの黄金の所有量と考えられても、其の国より遥かに貧しい隣国に渡れば、彼は程々の所有者という事にはならない。つまり政治学的中庸観とは社会に依存する。過剰過大の究極とは、尽きる事のない黄金、永遠を満たす黄金という事になる。また、不足過小の究極とは、完全なる常消失の事。又この場合は黄金に着目しているだけである。永遠の都と滅ぼし尽くされた無くなった場所の中間と言われても思考で捉えるのは容易ではない。捨捨二種の観察によって、増やす政策が消失する所は永遠の都である。減らす政策が消失する所は滅ぼし尽くされ無くなった場所である。中庸による不変の所とは、中程の政策が消失する所であり、其処は国政の偽りが及ばぬ所である。無政策なり。また空席の議論からの欲望の統制、中程の節制とは何か。中庸観によって、過不及のない状態であるから、増やそうとも減らそうとも欲さない所である。

*私は、中庸、中道思想に秘鍵あり、と直感しているだけであり又喜ばしく思っている。何でもそうだが、誰々が書いたからといって、増やそうとも減らそうとも欲さない所を知

り尽くしているとは限らない。唯何か本を見て書けばよいではないか。字面ばかりを追っても空しいという事。字面を追うのが学者だが、学者は膨大な文献を集めてきては読んでと、その名の通り学のみ偏り過ぎる傾向が見られる。学楽し過ぎて生涯を終える。

～仏陀と現代仏教に関して～

釈尊の手法は対機説法であったという事であるが、これは各人の能力に合わせて自在に説法を操ったという意味であろうか。仏教団体にも修行ではなく葬祭式の職業団体である、墮落している等其の様な批判が起こる度に、新宗派を立てたり革新して来た歴史である事は仏教研究者でなくとも明らかである。しかし、今日の仏教を考察する際に話題にしなければならないのは、仏教聖典の中で一番古いとされ、数多く存在する仏典の中でも最も有名な書の一つ「スッタニパータ」は、国、宗派を問わぬ聖典であるし、一般人にも読者が多い。その内、「第一章蛇の章、四、田を耕すバーラドヴァージャ」（中村元訳 岩波文庫）には、「詩を唱えて（報酬として）得たものを、わたくしは食うてはならない。…」と、ゴータマブツダはバーラドヴァージャに言い、バーラドヴァージャによって盛られ提供された乳粥を捨てさせた。この箇所は非常に興味深い箇所である。バーラドヴァージャは仏陀の詩に心を打たれ感動しそして乳粥を提供したのに、それを仏陀が拒否している。仏陀の時代は現在とは違う、仏教の経典は釈尊の死後まとめられたという事であるから、仏陀存命中に今日見られる経典は存在しない。経典が死後に編纂された段階でも、あくまで教団の修行僧内で読まれていた訳だろうし、つまり今日のように世界中誰にでもインターネットでも、という状況ではない。また、同書内、「第三章大いなる章、一〇コーカーリヤ」においては、地獄に対する強烈な記述が見られ、サーリプッタとモッガラーナに対して敵意を抱いたので紅蓮地獄に堕ちたコーカーリヤに対しては、自業自得と冷たげな心象である。ここに見られる記述を信用し仏陀がこの様に述べたとすると、これは弟子僧に対する説法と解すべきであって、サーリプッタやモッガラーナはこの上ない程の高僧、コーカーリヤもかなりの修行僧と見れば、仏陀は彼らに言っているのであって、一般人やまして一般人の未成年にこのような事を述べるだろうか？私は一切修行僧に敵意を抱きたくないと思うというか、仏国土の政治領域を考えれば一種の恐怖政治である。政敵は敵意を抱くものだ。つまり、門外不出という言葉があるけれども、”仏陀がこのように述べたと信じて”、出してはならぬ物が外部へと流出したと考えられないか。

スッタニパータとは仏陀の言葉、詩集という事であるから、これを世界中に普及、販売する事によって、それを見た者達が信者になったり托鉢にやって来る訳であるから、釈尊の詩集販売にあやかって仏教僧は食を得ている部分の方が、自分達の説法によって近隣住民達に托鉢してもらっている部分よりも大きいのではないだろうか？熱心な人はあくまで仏教信者であって信者ならばスッタニパータは誰でも読むだろう。つまりそう理解すると、地獄と天界等のムチとアメの釈尊の詩集で布施托鉢させている訳であるから、釈迦牟尼は、詩で感動させても乳粥を拒否しているのに、ましてや紅蓮地獄による恐怖心を煽りたて脅迫の詩によって乳粥を得るという構造が出来上がってしまっている現段階においては、仏

教団は当時の積尊のものとは、決定的に違うのではないか。地獄の恐怖心を煽り金を持って来させるのは詐欺師の常套手段であるし、問題ではないか？

*そう捉えると、もう既に托鉢システムが出来上がっているので結構とは言わずに、人権の、環境権による修行する権利は、仏教者達にとっても選択肢が広がり有意義なものとなり得る。一般人もそんなに恐れずに（と言っても難しいだろう、私も恐れているから）、やってきた若僧（年配の僧は言いづらいし失敬であろう）に、明らめてみよ（明布施托鉢）と言ってもよいだろう。